

農耕と文化



千葉大学 名誉教授 古在 豊樹
(独)農業環境技術研究所 評価委員長

文化を意味するcultureが「耕すculture、cultivation」に由来し、また、agriculture、horticulture、aquacultureの接尾語cultureが、業、芸、養・殖のような多様な漢字で表現されていることは良く知られている。これは、文化が、農作業の合間の豊穡の祈り、田の畦での謡い、踊り、祀り、さらには観天望気、水利などの総体として生まれ、本来、芸術、学術、技術などの融合体であることを物語っている。

農作業の中で生まれた文化は、「いのち(生命)を育む」ことを根幹としている。「いのち」は、その歴史的集積である遺伝的特性で規定されつつも、心、身体、食および環境の4要素の有機的結合の中で生まれる。風土とも言い換え得る環境は、自然環境(気象、地象、自然生態系)および人間の歴史的・社会的な文化環境で構成されるので、文化・農耕は自ずとローカルな特性(地域性)を有する。

さて、現在の農学は、ローカルな文化の中での学術面を探求する部分と西洋起源のユニバーサルな科学技術にもとづく部分で構成されている。20世紀後半では前者より後者が優勢であったが、21世紀になって前者の地道な復権がある。市民の生活でも「農」のある生活やまちづくり、言い換えれば、「いのちの4要素」への社会的関心の高まりがある。これは、ローカルな文化の価値を再発見する動きでもある。

農耕から生まれた文化には、情動、知覚、言語および自然と交流しつつ生きる本能を総動員して構築された、世代を超えて伝えられるべき「心(こころ)」と智慧が息づいている。農耕文化と生活文化の見直しは文化全般の見直しでもある。農村の人口の世界的

な減少と農村における文化の変貌の中で、農民気質(かたぎ)を潜在的に有する都市住民(耕す市民)の生活および「農耕文化都市」が21世紀の文化の基盤の一部となりつつある。

上述の文化的潮流に対する現在の農学、農政の対応はいかなるものであろうか。生産農業・生産環境一辺倒から環境保全型農業、農業の多面的機能、農村地域における生物多様性の重視への方向転換が過去30~40年前から徐々になされ、その成果が農学、農政の中で数多く得られている。その中でも、農業従事者数が激減しつつある日本で、農学、農業、農政の役割は、農村・地域の活性化、食料自給率・農家所得・田畑の生産性の向上、農業環境の保全などを支援するだけで良いのだろうか。都会とその住民にも直接的に貢献する農学、農業、農政はありえないのだろうか。たとえば、今後の「都市農業」は農地での農業従事者だけの役割なのか。植物工場による野菜生産の文化的意義はあるのだろうか。「農業・環境・技術・研究」の意味を「文化」の視点から再考した上で、農学、農業、農政の問題を、大局的、長期的観点から論じる組織と人材はどこで生まれるのだろうか。

「雨二モマケズ」、「銀河鉄道の夜」、「風の又三郎」を約80年前に著した宮沢賢治は、農耕(culture)と文化(culture)の一体化と、芸術・学術・技術の一元化を試みた。彼の影響を受けた人々が最近創り出した3次元電子音楽化されたアニメ映像芸術は、芸術・学術・技術を融合する文化の試みだとも言える。そこから、私たちは何を学ぶことができるのだろうか。